

のやうにも思はれて来た。そしてその刹那、範宴は第十二觀の命令を聞いた。
「……この事を見る時、まさに自心を起すべし！」
自心を起すべしといふ、その言葉は、今迄經文を誦じて居た時よりも、今日はおつと鮮かに新らしく響いた。

吾を忘れて、新らしい生活の幻を畫いて居ると、法慧が襖をあけて、

「僧都様、お風呂がわきました」と知らせてくれた。

「あゝさうか？ 御苦勞様！」といつて範宴は立上つたが、何時にもなく僧都の御機嫌が美はしかつたのか、法慧はニコリとして、いそいそ手拭や浴衣を出して差上た。

「僧都様、お久しぶりの御入浴であらせられますね！」といつて、また法慧は飛び上るやうにして居る。

「あゝ、今日は大變身體の具合がよろしい。久しぶり故、今晚はお前の托鉢に出た旅の話でも聞かうか？」といふた。

晚餐がしまへ、夜のお勤めがしまへると、範宴は、法慧と爐をかこんでゐた。

「どうだ？ 初めての一人旅は面白かつたのか？」と範宴は尋ねた。

「嬉しいことも、悲しいことも御さいました。旅に出ますと、全く寺に居ます時とは氣持が違ひますね？」と法慧は答へた。

「どんな風に違ふのかね？」と範宴は尋ねた。

「旅をして居ますと、いろんなことを考へて悲しくなります。そして、人がなづかしくなつて、一寸した人の親切も身にしみ入る程嬉しゆうなります。けれども、寺に居ますと、度々人が憎くなつたり、おさへつけられるやうな氣になつたりします」

「それぢや山門よりも旅の方がいゝだらう？」

「えゝ、それでも旅の身は、本當に心細うなつてしまふことが御さいますね。そんな時は、私は父母のことを懐ふて涙が出ます。今度は旅の歸りに、兩親を訪ねてまいりました」
兩親の許で働きたいとは思はないのか？」

「両親の家に戻りますと、二三日はほんとに嬉しゆう御座いますが、永く居ますと、心が落つきませんで、じつと遊んで居るのが苦しゆうなります……でも、一度出家した身は、また元の野良仕事はつらう御座います」

「お前も、大ぶん悩みの兒ね？」

「え、僧都様がいらつしやらなければ、私は頸でも縊つて死ぬるのかも知れません」

「でもね、人生は旅だ！ 私は何時どうなるか分らない！」

「その時は、どこまでも、お供さしていたどきだと思ひます！」

○「人を慕ふ心は美しいが、頼る心は身を危くするんだがな！」

「僧都様、私だけは見棄て、下さいますな！」

「見棄てなんかはしない。が、何時も一人で旅をして居る気では居れないか？ その寂しい心は尊いものだが……」

「旅をしながら、私は何時も僧都様のことを案じて居ました。或る日なんか、日が暮れまして、長い一條路を女の兒と二人で三里ばかり歩ききましたが、その時私は、僧都様から承りました

お話をその女にして聞かせました。寂しい寒むい晩でしたが、月の冴えた晩でした」といつて法慧は涙ぐんだ眼を下に向けた。

「……」

「無口な女の兒でしたが……」と法慧は俯向きながら話を續けた。「京都を出て、五日目になるといふ女の兒でして、なづかしさうに私の話を喜んでくれました。私も、その時は寂しかったものですから、僧都様から聞かされた話だといつて、二人であなたをお慕ひしました。それが哀れな女で御さいまして……」

「どうした旅の女だつたのです？」と範宴は尋ねた。

「京都のさる公卿の家に十六の年から、お仕へして居たといふのですが、この頃悪るい夢ばかり見て、よく眠れなくなつたら、國の母がなくなつたといふ言傳があつて、もう父も母もない越後まで戻るところだといふのでした……私と同じ年で御座いまして、私は初姫のことなど思ひ出し、幾度も衣の袖をしぼりました。その女の名まで、初代といふんでせう。私は妙な氣がしました。輪廻といふやうな不思議な氣がしました！」

範宴は、少年の哀話に思はず引つけられてしまつた。そして、

「その女こ兒ごにどんな話をして聞かしたのかい？」と尋ねた。

「三里の道でしたから、いろいろな話をしました。義經の話もしました。あなたが、十三のお年としでいらした時分、義經が叡山に見えましたといふことでしたね。その時、あなたが川の上で、義經にお話しなすつたことですね。私はそれをすつかり初代に話して聞かせました。

そのお話は斯うでしたせう。

——あゝどうでせう。山々のうねりは、

ぬき上つては、すつと背をのばし、

そして又うねりうねつて、

沈みまた突き上つたあのいきほひ、

私はあの山々を見てると、

何か胸に迫つて泣きたくなります。

——山々のあのいきほひを見てゐると、

何だか寂しいものが光つて居ますね！

それが私には美しいんです。

たまらなく美しいんです。

私は走つて行きたいやうな気がします。

けれども又勿體ないやうな氣もします。

——空にうつつた山々の色は、

神秘的ぢやありませんか？

私はその神祕に吸ひこまれさうです。

身體がふるえてなりません。

——私は四五年前父も母もなくしました。

が、空も地も私を愛しています。

私は空を戀します。

山を戀します。

廣ろい地の上を戀します。

御覽なさい大地も空も、

みんな愛に滴つてるぢやありませんか？

その中で人間は何故戦はなければならぬのでせう？……

あなたが斯う仰つしやると、多情多感の青年武士義経は、深い溜息をついて、手を拱いだと思つたら、出しぬけにあなたに抱きついたんでせう。

そして、「私は、そなたを愛する。私にも、あなたと同じ日があつたのだ。けれども、私の胸には、餘りに源氏の精神がひどく漲つてゐた。その力は、平家を屋島壇の浦に全滅した。けれども、餘りに強い私の衝動は、もろくも亡んだ平家を見て、それに満ち足つて居れないのだ。漲り溢れる力は死よりも強い……。私はその力が、これから、どういふ結果になるか知らない。けれども、力は一切の權勢に詔びることを知らない……。その力が戦ひとなつて現はれ

たのだ。私にとつて、戦ひは美しい。實際戦つて勝つことを知る勇者でなくちや、その美しい輝きは分らない。戦ひには神祕がある。その神祕は戀よりも美しい。熊谷直實は、敦盛の首を切つて、切りに悲哀を感じたが、死を決し、勝利を信じて大軍を動かす戦ひの心は、悲哀を超えた神祕に攝取される。私は美しい女を見ると、胸がひきつけられるが、戦ひの聲を聞くと、それと同じやうに胸がひきつけられる。私は戦士として生れて來たのだ。私は立派に戦はう。私の劍は悪戦に汚れはしない。戦ひの神祕は、凡てを巻きこむ男性の雄たけびなんだ……。それは戀のやうに私の心を満す。戀と戦ひ……。それが最も正直な男性の告白なんだ……。そなたがいはれるやうに、地の上は美しい。草木の緑を踏み、蒼い空を吸ふて立つて居ると、身體ぢうが愛の靈感にふるえる……。そんな時には、満されない悲哀が、私を悲しませるが、戦ひと戀はその缺乏を満してくれる。戀ばかりでもいけない。戦ひばかりでもいけない……。戦ひと戀が私の二つの翼なんだ」といつたんでせう

その時、あなたは「殺生を禁ぜられた法師が、武士と共に戦ふのは破戒です。僧侶は、悲しい心で人を愛し、靜かた思ひで、死に勝たなければなりません」と仰せられたんでせう。私は

そのことを、初代にいつて聞かせました。

すると初代は……ほんとにね、さうですわね。悲しいと、本當に人を愛する心持になりますわね。愛するから悲しくなるのかも知れませんが……といつて、しんみりと私にくつついて來ました」

こんな話をして、法慧は俯向いたまゝじつと黙りこんだ。

「うむ。それはいい話だつた。丁度詩のやうだ。初代といふ女の兒も、詩人のやうな綺麗な心を持つて居るね」と範宴はいふて、話の續きを促がした。

「それから、いろんな話をしました。天の川の男星と女星の話もしました。道で疲れてしまいましたから、路ばたの小さな觀音堂で一休みしました。

そこで、初代はいろんな哀れな身の上話しをしたぢや門座いませんか？ 私はいつのまにか涙ぐんでしまいました。

初代は、國に戻つても、父も母も居ないのに、何を求めて國に歸らうとするのか知らないが、歸らないでは居られないといつて、袂で涙を拭きました。

とう／＼後には二人で泣きました。私もとう／＼身の上話しをしまして、初代のことを打あけその初代が初代によく似て居られたといふこともいつてしまひました。

すると、初代は、私を初姫様の代りにして下さいといふんでせう。私は、初姫のやうに思へるといひました。……罪でせうか？

すると、初代は包みの中から、袷あはせを出して、板間の上に敷きまして、私に坐つて下さいといふんです。遠慮して少しばかり辛つとのことで、下に敷きますと、今夜は二人でこゝに月を眺めて休ませて下さいといふんでせう。私は、どうしようかと思ひましたが、とう／＼そこに泊りました。私は懺悔します……私は、もう山に戻つて來ますが、怖ろしゅう御座いました。

歸りに兩親の家に寄りますと、とう／＼兩親から追はれるやうにして出て來ましたが、ほんとに悲しくてならなかつたのです。けれども、僧都様がゐらつしやるからと、只それだけをお頼りにして歸山いたしました」斯ういつて、法慧は泣き出した。

「……」範宴も、もう言がいへなくなつた。

「私は懺悔します、どんなに罰を與へて下さつても、よろしゅう御座います」といつて、法慧

は手をついて、額を疊におしつけた。

「お前の涙も、観音堂の宿りも、私には美しい詩のやうに思へる。私は、お前を罰することが出来ない！」範宴は斯う答へた。

「……」

「さあ、お茶でも飲もう。鐵瓶が沸つて来た。お茶を入れておくれ！」斯ういはれて、法慧は、茶器を揃へ、範宴に茶をついで差上げた。範宴は、茶をのむと、膝をくづして、

「さあ、それから、初代とどうして別れた？」と、引きつけられるやうな感じがして尋ねた。

「私は何處へ行かうといふ目的もなかつたものですから、どこまでも初代の行く方へと、一緒に行きかけたのは山々でしたが、或る道の分れ目に來ますと、急に心が責がめられまして、別れました。寂しいところで、人目もなかつたものですから、初代は私に抱きついて泣きました。私も一緒に泣きました。

そして初代は、自分の故郷の方を指差して、歸りには廻つて立寄つてくれるやうにいひました。別れて、行く行く、二人は姿を眺め合ひました。菅笠を手に持つて、裾を端折つて、しよ

ぼく／＼歩いて行く寂しい初代の姿を見ますと、私は涙ばかり出てならなかつたのです。とう／＼私は林の中に行つて、地の上に泣き倒れました」斯ういつて法慧はまたハラハラ涙を流すのであつた。

さういふ話をきかされた夜、範宴は床に就いて、少年法慧と初代の悲しい愛の一夜を意地らしく思ふた。その思ひは、いつしか、玉日の上を懷ふ自分の悲しみに變つて居た。

範宴は悲痛な溜息をもらした。

〇「慕直に人生のあらゆる苦痛を享受しようといふ決定の、促が自分を驅りたてゝ居るのに、心は戀の夢にとけて流れるやうな悲しみを抱いて居るではないか？ 自分は氣壓の變るまにまに、弄ばれる弱い存在ではないか？」斯う思つては、疲勞の中に、こん／＼と眠り込んでしまつた。

範宴は愕然として屢々自己の立場に驚かされた。それは、彼自身が今、人生の危機の網頂に立つて居ることを意識した刹那に畏懼の感だつたのである。

「人生即苦の生に募進しようといふたところで、それは自分の生活に何等の價値を意義づけるか？」この一念は疾風のやうな勢で、範宴の心に起つて來た。

するとまた、「僧侶の中から教主が出る。日本の救ひはこれからだ！」と嘗つて慈圓僧正がいはれた一言が、神祕的に、しかも新らしい價値を意義づけて範宴の心に臨んで來る。

が、さういふことは今迄、飽くまで考へて來たことだ。然し考ゆれば考へるほど、地の底を掘るに従つて水が滾々と湧き出るやうに、思念の泉が口をあけて、無意識的に募進しようとする範宴の靈魂を巻きこんだ。

「既成概念から解放されよ！」結局、範宴はこの一念の力で、道を見出さうと努力するより外はなかつた。

「願作佛心だ！ 即身成佛だ！」この外に哲學も宗教もないのだと思ふた。

「然し、自分は募進にその道程を走せて居るか」と、斯う考へると、大なる疑懼の網にかかつて、兎のやうに悶えて居る自分を見出す。

「何かにうたれたい！ そして眞劍になりたい。でなければ、吾が思念も存在も益々窺つて行くばかりだ！ 實在が醒めて居るならば、吾が靈魂も醒めて居る筈だ！」

範宴は、天台の六即の次位を考へた。そして他教大師でさへ、觀行五品の位、即ち分眞即に住して、究竟即の妙覺にまで進まれて居なかつたことを思ふと、天台や、眞言の行によつて、果して何人が救はれようと疑つたことは、今更でない。現に、當山有爲の青年僧たちが、苦悶して居る事實を見ると、じつとこのまゝに疑懼しては居られなかつた。

だからとて、範宴は、釋籤の第六から結論さるべき、「無明即明なるが故に、煩惱即菩提心なり」といふ瓢箪鉢式の信仰に安住することは勿論出来なかつた。

「無明は無明だ。明は明だ。煩惱は煩惱だ。菩提心は菩提心だ。無明を破る認識の光によつて無明は明となり、煩惱を破る認識によつてのみ菩提の心が湧くのだ！ 煩惱即菩提とは、人生即ち苦なるが故に必然願作佛心の正覺にうたれるといふことだ！」範宴は、どうしても斯う

解するより外はなかつた。

或る日、範宴は衆僧と共に佛壇の前に座つて讀經して居ると、もう居たゝまらなくなつた。衆僧の聲が自分を呪つて居る地獄の叫びのやうに思はれて來た。罪惡の恐怖が、全身の毛穴から絶對の威嚇を以てしみ込んで來た。

「いつまで愚圖々々するのだ！」と、良心がどん底から叫んだ。範宴は讀經半ばに突如起ち上つた。その刹那、押しても押されない力が閃めいた。

つか／＼と書院に歸ると、心は烈火のやうに燃えて居る。「今だ！ 今が凡ての原始だ！」彼はこの一念に、すつきりと決心が出來た。

書院を出て、庭に出で、庭から山林の方へと足を運んだ。溪谷は雪どけの水に涸んで居る。もう、木の芽がポツ／＼とふくらんで居る。全山が力をこめて、唸つて居るやう。範宴は、最後の日を山嶺に祈らうと思ふた。もう、何等の思念もなかつた。只罪に亡びる苦悶の底から、ぬき上つた力の清新な戰慄だけしかなかつた。

「おゝ晴れ渡つた山嶺！」思はず範宴は叫んだ。

「價值！ 價值とはこれだ。この心で生きることだ！ 何がこの願力を障碍し得うぞ！」

山嶺に突立つた範宴は、早春の蒼空を胸一ぱい吸ひ込んだ。そして叫んだ。

信心即ち一心！

一心即ち金剛心！

金剛心は菩提心！

この心即ち他力！

全山をこむる力のうねりの上に、すいすいとして鮮かに、透き通るやうな白光の鋒をふりかざして、春の先驅が陣を揃へて居る。その中に、過去幾千年、人類が疊み上げて來た壘壁の蒙を破つて、天親菩提が廻向を頌榮して居られるやうな解放の喜びがあつた。

「一心に無碍光如來に歸命せよ。

本願力に乗ずればその身は報土に在るのだ。

願土に至ればすみやかに

無上涅槃を實現して

大悲の心が湧いて来る。

それが廻向だ刹那永遠の救ひだ！」

どうしたのか？ それは全く不可稱、不可思議の經驗だつた。範宴は、その時、一切の疑懼と惱みから救はれて、光のてつべんに立つて居る自分をはつきり感じた。

範宴は、自分の心の中にも、一大頌樂の奏鳴樂を聞いた。何等の理由もなかつたが、只その瞬間々々を縫ふて、三千の諸法を具足した一心の閃めきが、意識のどん底に、はつきりと現はれては、一大奏鳴樂のやうに、しかも無限に散つた。

その時、範宴は、無條件に八千億劫の重罪を斷ち切つて、報土に新生したやうな不可思議な美感にうたれた。

その感動は、満ちあふれた泉のやうに、肉體の堤を越えて、びつたりと不死永遠の存在と觸れ合つた。

「絶対解放の奇蹟だ！」と範宴は自ら思ふた。彼は羯摩からも、業からも、惡縁からも、また

輪廻からも、全世界からも、善惡の規矩からも、死からも、絶対に解放された自由の喜びをはつきりと吾が衷に感得した。

その時、限りない蒼天も、悠久な大地も、彼の心に存在の神祕を叫んだ。けれども、夫れにも勝して、もつと深く蒼天を超え、大地を越えた不可稱の願力が彼の心に應へた……それは絶對的な命令のやうにも、絶對的な救ひのやうにも感ぜられた。

その心持は、一切の思念を超えて居たけれども、それ自身完全な自明の眞理として、範宴の全意識に満ち足つた。その全意識の前に、過去一切の經驗は幻影のやうに、その眞實性を失つてしまつた。

無義にして義なるもの、絶対權威が吾がこの心に光つたのだと範宴は思ふた。その權威に觸れた心持には何等の矛盾もなかつた。矛盾のないその權威は、固定世界の中に定まつた善なるものではなくて、自分自身の價值と共に、新世界を創造する絶対至善の靈感だつたのである。

喜び！そして森嚴な敬虔さ！その心に充された範宴は、山嶺の土の上に膝まづき、額を土の上におしつけて祈つた。

「私の功德ではありません。自力の報ひではありません。私は悔ゆる心、疑ふ心、罪をつくる心をしか持ちません。私は只煩惱の心で救ひを嘆き求むる弱い者で御座います。けれども、あなたの本願の故に、あなたの御誓ひにひきつけられ、一念發起の刹那、無碍の御心光に攝取され、淨土壯嚴の生にあづからせて下さいますことを、かしこみかしこみ御れい致します……南無阿彌陀佛！」

念佛は泉のやうに湧きあふれて来た。土の上に、範宴は轉げ廻つて喜んだ。そして、罪を洗はれた幼児の情を、二十九歳のこの春、初めてしみじみと味つた。

範宴は、七八歳時分のことを考へ出した。「あの頃は、こと毎に驚異の念はあつたが、始終外界に支配されては、畏懼し疑ひ、そしてはいつも何ものかにおさへつけられるやうな苦しみに痛んで居つた。あの時分の心持に、はつきりとしなかつたものが、この年になつて、初めてはつきりした。それは衷から湧く永遠の若やかさだ……慰めだ……放免と無罪の閃光だ！」範宴はさう思つた。

範宴は起ち上つて、山の上を歩るきながら、山下の景色に見入つた。午後の日光を靜かに浴

びた村々……そして都！ どこを見ても深いなつかしさをそゝられた。

「さうだ。わが計らひを棄て、外的條件の一切から解放された他力の信は、み佛の誓願に生かされて在るのだ！ 自分は、山を下らう。なつかしき村々、町々よ！ あらゆる人々よ！ 自分の前に立つて、み佛は自分の道を教へて下さる。行かう人間の世界に！ 直ちにみ佛を見奉ることの出来る世界に！ 人々が相愛する自由の世界に！ 自ら勞して食を得、妻子と共に人生を苦しみ味ひまた楽しむ人々の間に！ そして自分も一切の條件から放たれて、下界の人々に親しもう！」範宴は斯う思ふて、山門の方へと急いだ。

九

いよ／＼叡山の座主にお別れをし、親しい學徒たちにも暇乞し、一般の僧侶たちにも挨拶をして、山を下るといふ其の日には、張りつめた心が融けて、流石人情にひかされてしまつた。

いよ／＼山門を出るといふ其の時刻になると、先づ範宴は大乗院の前に一人立つた。こゝは範宴にとつて第二の故里である。十九年前、慈圓僧正に供はれて登山した時分、初めて住まは

せられたのは此の大乗院であつた。院の前に立つと、過去十九年間の面影が、パノラマのやうに、胸裏を往來して、懷舊の情に胸が塞がつてしまつた。範宴は階段の下に膝まづいて、掌を合せて居ると、失はるゝ故郷の悲しみに襲はれて、涙がハラ／＼出て來た。

「私は、自分の過去が自分を禍ひして居るとは思はないのです。凡ての吾が過去は、今日の私を導き出してくれたのです。私は大乗院に感謝する。その頃私をとり圍んで居られた親切な僧侶たちに感謝する。過去の私は煩惱の子であつたが、現在の一念は遠い全過去を贖ふたことを私は知つた。私は過去の綱にくゝられて亡びるわけには行かないので、今こゝを暇乞します。あゝ大乗院に育てられた多くの若い僧侶たち！あなた達の上に幸福を祈ります」斯う念じては、また涙を流して起上つた。

大乗院の近くには、權眞坊の庵がある。範宴は多年、意地目られたその苦しみをも仇にしないで、庵に近づいた。心が柔らかなになつて、み佛の慈愛が胸に一ぱい感じられた。

「權眞様！御免下さい」菰の外から範宴は庵主を呼んだ。

「誰だ？」大槌を投げつけるやうに力の籠つた確信ある聲が答へた。

「愚僧範宴です！」

「範宴坊か？はいつて來い！」山門の階級を眼中に置かない權眞は横柄な口調で斯ういふた。菰をあけて、内にはいると、權眞は座禪を組んで居た。頑丈な體軀の上には、獅子の顔のやうな曲線を刻んだ大きな髭面が、眞正面を見て居た。その瞳は少しも動かない。一見、肉慾的な脂肪質の相貌ではあるが、絶對的に性慾を征服したと思はれる其の顔には、底光りと怖ろしい威嚴が見られた。範宴は黙つてその顔を見た。

「何を求めて來たのだ？」權眞は一喝した。

「お別れにまいりました。多年修業をさしていたゞいて有りがたう御座いました！」

「……」權眞は暫らく黙つて居たが、呪文を唱へる時のやうに、左右の指を組合せ、氣合をこめて、何か口の中で繰り返へしごとをいつた後、「何處へ行くのだ……また迷ひ出したのか？不徹底な野狐！汝の足の裏を見ろ！如來の御頭を踏みつけて腐れて居るぞ！そこに、ぶつ倒れて、懺悔しろ！」と怒鳴つた。

けれども、範宴はこの意地悪るい權眞が、今日はどうしたのか、温かなものを持つて居るこ

とを直視した。範宴は、十幾年寒暑風雪に晒された此の庵の主には、何かしら柔らかなものが在ることを知った。

「あゝ、私は只勿體ないのです！」範宴は只それだけいふた。

「一度最後に踏みつけた地の上が、人間に許される只一つの永住所だぞ！ 迷ふ奴、名門を求むる奴は、み佛の頭を踏みつけてあるき廻る野狐だ！ 俺を見る！ 俺は十六年前、この木の枝に頸縊つて死のうとした。心には迷ひ、身體は傷で生きても居れなくなつたし、山門からは追つばらはれようとしたからだ。然し、俺がこゝに立つて、この木の枝に帯を吊り下げ、ぬつと頸をのばした刹那、如來が俺の前に現はれ給ふて、俺を救つて下さつた。死のうとした其の場所が、忽ち淨土となつたのだ。勿體ないとも勿體ない！ 俺はこゝから動かない。誰も俺をこゝから追つばらう者はないのだ。こゝは如來の淨土だ！ 地上の最も神聖な奇蹟の行はれたところ、もろくの奇蹟がこれから後も行はれる聖地だ！ 解つたか？ 最後に踏みつけた土地が、人間永住の故郷だぞ！」

權眞は野獸のやうに斯う叫んだが、範宴はその言葉に反感を抱く段のことか、今迄一度も感

じなかつた神聖な意力の閃めきを、はつきりと此の權眞に見た。

「權眞は狂者だ！」と日頃思つてゐたが、然しそれは不可抗の壯健、巖のやうな意力をほの見せた神聖な狂態だと範宴は今思ひ改めた。

「よく解ります」とて範宴は念佛をととなへた。

「解つたら、そこに踏みとまれ！ いや、そこは、如來の街頭だ！ 勿體ない！ 一步退つて、後に膝まづけ！」

斯ういはれると、頑固一天張の權眞の缺點が、いやに胸を打つた。けれども、この頑固さがあればこそ、彼は十幾年も、菰一重の庵の中に、夜具もなくて雨にも寒さにも堪えられたのだと思ふと、範宴はどうしてよいか解らず、いはれるまゝに、一步退ぞいて膝をかゞめた。

「俺を信ずるか？」一層怒ろしい聲で、權眞は新たに一喝した。

「私は、私自身をさへ信じ得られない煩惱の兒です。自分に傷づき敗れた私は、彌陀の本願を信ずるより外はありませぬ！」範宴は斯う答へた。

「馬鹿！ 無學者！ 冒瀆漢！」と続けざまに、權眞は怒鳴した。「汝は二十年間も、この山門

で何を學んだのだ。僧都も糞もあつたものか？ 偽善な權門が與へた冒瀆の僧位は、み佛の御頭にぶち込む釘だぞ！ み佛は、人間に僧都の位も、僧正の位も授け給はないのだ。範宴僧都！ おい、質學問の質看板……僧都といふ質看板のかけにかくれた汝の學問は、み佛を縛る毒の繩だぞ！ 汝は何も眞實な學問をして居ないのだ！ その質看板をはぎとり、み佛の御頭にぶつつけた大釘をぬいで、大罪をあやまれ。そしたら、俺が教へてやる！」

「いや、それは私からお詫びしようと思つて居たところでした。私は僧都の位を棄てました。み佛の頭から大釘もぬがしていただきました。けれども、一度打つたみ佛の頭の傷は、何といふ痛ましさをせう。私は罪をおそれます……けれどもみ佛の大悲は罪人を赦して下さいます！」
範宴は斯ういふた。

すると權眞は、「うむ。よくいふた。お前は太ぶん悟れたぞ！ けれども、まだ救はれて居ないので。だから俺が教へて聞かせる。お前は、先何といつた？……煩惱の兒だから 彌陀の本願を信するより外はないといつたな。味噌濾で水が汲めるか？ 傷つき破れた器に五穀が入れるるか？ 馬鹿をいへ！ 味噌濾には水が入らず、破れ器には米が入らないやうに、煩惱の

罪の兒に、彌陀の本願が宿されるものか？ 勿體もない屁理屈をいふな。質學問をした奴が、そんなまぬけた屁理屈をいふのだ。悔改めないと罰が當るぞ！ 汚れ果てた罪人、詐はりにつかれた悪人が、直ぐ様、如來を見奉つて救はれるとは以つての外の不心得ぞ！ 地獄、餓鬼、畜生、人間は、有無の邪見を破すべしと、佛の仰せを承はつた龍樹菩薩の御媒介がなくては、大乘無上の御救ひにあづかることが出來ないのだ！ 俺は、南天竺、本師龍樹菩薩の權化だ！ 日本に只一人垂跡しました龍樹菩薩とは此の權眞のことだ！ 俺の媒介がなくて、何で佛の神祕に救はれるものか？ 權眞は正覺の教法師だぞ！ この教法師を信じないものは、地獄の火にあぶられる。見ろ！ この庵の上にさしかかつた木の枝を！ 十六年前俺が救はれた刹那には、この樹が龍樹菩薩になつて、俺をみ佛の救ひに導き給ふたのだ。俺が帯をぶらさげたと思つたその枝は、龍樹菩薩の御手であつたのだ。俺は救はれて、龍樹菩薩の印契を魂の中にいたゞいたのだ！

この樹を見ろ！ 俺が物を食ふ時と、糞をひる時と、眠つた時には、この樹が再び龍樹菩薩となり給ふて、叡山を守り給ふのだ。俺は、少つとばかりの物を食ひ、糞をひることさへ、汚

らはしい程の神聖なものだ。けれども、俺がひつた糞は、この木の食べ物になるのだ。龍樹菩薩は、俺がひつた糞をたべてまで、人間を救ひに導いて下さるのだ！ 勿體ないとは思はないか？

だから、俺は人間どもの食ふ物を食ふのは勿體ない。俺は木の葉を食ふのだ。木の葉を食つてひる糞は、勿體ないものを食ふても、飽くことを知らぬ汝等人間どものひる糞とは違ふのだ。俺には、凡ての木魂がわかる。凡ての木は靈氣の妙化だ。俺はその妙化の木の葉を食ふのだ。だから、暑さにも寒さにも平気で堪えるのだ。俺は木のやうに、夏の日をあびても、冬の雪をかぶつても平氣だ。木は俺の友達だ！ 俺の仲間だ！ 人間よりも正しく立つて、永く生きるのは木だ。木は言をいふ。お前達には分るまいが、俺にはちやんと分るのだ。木は人間を救つてくれる。だから、龍樹菩薩は、俺に權化なさる前、先づこの木に權化し給ふたのだ……」

權眞坊が説きたてる眞最中、南都から來たといふ十名ばかりの若かい僧たちが、庵の前に來て音のうた。

一見ろ！ 權眞に道を求むる者の踵は跡を絶たないのだ。名もない彼奴等は、虚偽な學問に惱

水症を起した汝見たやうな奴よりも、もつと悟りが早いのだ。俺を信するか、信じないか？」

權眞は怒ろしい聲で喝を叫んだ。

「私は、あなたの力を尊敬します……」といつて範宴は正直な告白をした。「あなたは、あなたの性格に於て徹底して居られます。あなたの原始的な御生活は、大變私を反省させます。あなたは、確かに疫病に勝ち、四圍、境遇にも勝つ程の、巨大な巖のやうな權威を持つて居られます。私はそれを尊敬します。けれども、私はあなたと同じ道をそのまゝに歩るけけないのです。あなたの行を私は誠に素破らしいと思ひます……私は今迄、あなたから教へられたことが少くないのです。けれども、私にはそのまゝ、あなたに従ひ、あなたを眞似、あなたを信ずることが出來ないのです！」

斯ういふと、權眞は鬼のやうに嚇として、

「馬鹿！ 呪ひの子！ 汝は地獄の火にあぶられる！ 頑迷不靈の罪に腐つた其の足を、此の聖地から掃き出せ！」と怒鳴つた。

範宴は稱名を唱へて、庵を出て行つた。そして深い溜息をついた。

「あゝ、權眞坊も苦勞をしたのだ。生きても居られない程の苦悶にさらはれ、絶望の淵に臨んだのだ。その惱みの力が、覺醒の神祕にうたれたのだ。權眞坊が、あゝ頑固にがみがみと服従を人に求め、俺を信ぜよ！」と迫るのは、許されない獨斷ではあらうが、轉機の境遇と性格から來た止むを得ない結果なんだ！ 惡僧！ 一言に惡僧といつて退けてはならない。彼も亦救ひを信じ、彼自分の性格に従つて救ひを實證して居るのだ。生きることの惱みが、彼をさうなしてくれたのだ。あゝ惱みの功德！ その結果が、どうあらうと、その人を制し、その人を咎めてはいけないのだ。人道を蹂躪するやうで、しかも血を吐くやうな人道の痛ましさが、權眞の頑固な信念には裏づけられて在るのだ！」

斯う思ふと、範宴は今迄、權眞坊の生活が自分とは全然没交渉であるかのやうに思ふて居た敵對的の心持を、自分ながら耻ぢ入つた。何時の間にか、範宴は優しい心持で、眞實權眞を愛する氣になつてしまつた……とその途端、彼の胸は、春の潮のやうに洋々として暢びやかな慰撫に撫でられて居た。その心持の奥底から、過去二十年、自分が嘗めて來た苦しみ、叛逆の情……それが悉皆融けてしまつて、身慄ひするやうな神聖さが、懐ひ出の情と共に、範宴を涙ぐ

ませてしまつた。

權眞坊の庵の邊から、直ぐ根本中堂の方へと足を向けて居ると、少年僧法慧が眼を泣き張らして走つて來た。その時、範宴の胸裡には、山門に對する哀別の情が一ぱいになつて居た。

「僧都様」法慧は、範宴の側に立止まると、言がいはず、唇を顫はし、目蓋に痙攣を起して、涙をバラ／＼落した。

範宴は無言のまま、そこに立つた。

「僧都様！ 五十名ばかりの僧侶たちが、赤山明神まで、お見送りさしていただきたいと申されて居られます……一寸お待ち下さいまし」法慧は斯う訴へた。

「もう、皆様にお別れをしたのだ。お見送りは一切お辭を申した。お見送りしていたゞくやうな、世間の榮譽を私は持たないのだから。……座主僧正にも、よくその事をお願いした。私の下山が、正直に眞直な修業をされて居られる若かい僧侶達の跪つきとなり、誘惑となつたら、誠に申譯がないのだから、私は一人で山を下るやうに、先、座主殿にも、とくとお頼みして出

て来たのだ！」範宴は斯ういつた。

「僧都様、藏圓様や私達十名ばかり、昨夜は徹夜で、お見送りのためお祈りをしたり、法華を稱へさしていたゞいたり致しました。その人たちが、ぜひお見送りしたいと申されます……その外にも三四十名の方が熱心のお願ひで御座います！」法慧はまた斯う訴へた。

「有りがたう御さいます……皆様によろしく傳へて下さい。私が四五十名の若かい僧侶たちの跪つまづきとなつてはいけないのだから……私は寂しく山をおりて行かう。寂しい心には、皆様の御情ごじやうがはつきりと感ぜられるからね。それが何よりも、有りがたいお別れのしるしだ。法慧！お前とも、こゝでお別れしような。よく修業をしてお呉れ！ 凡てのことはみ佛が知つてゐらつしやる。悲しみも、寂しさも、また苦しみも、皆みなみ佛のためだ。眞面目な苦勞は決して徒勞ぢやない。私は、傳教大師に感謝する。當山の歴史に感謝する。當山の僧侶たちに感謝する……凡てが自分に叛逆して居ると思ふのは、迷ひから來る人間のはかなさだ。なあ、私はさう思ふ。お前はよく私のいふ事を聞いて守つて下された。今日もよく、私のいふことを聞き容れてお呉れ。ではお左様なら……」

「僧都様！ 私一人にはお見送りさして下さいまし」法慧は猶しも落涙らくなみ滂沱ぱうたとして、範宴の袖をつかまつた。そして、涙に咽び且つ口ごもりながら續けた。「僧都様がゐらつしやらなければ、私は當山に居る意義が解りません。で……で、どうぞ、僧都様……何處へでもお供いたしますから、わ、わたくしをおつれ下さいまし」

「お前の心持はよく解つてる。お前と別れたくないのは山々だ。けれどもね、小さい情こころのはからいで、久遠の道を誤つてはいけない。お前には、お前の使命がある。お前はみ佛の功德で、お前の道を知らしていただかないといけない。お前は、餘りに私を崇拜し過ぎて居る。崇拜する心は美しい。けれどもね、お前も自心の明あきらが大切な年頃になつたのだ。崇拜は、人物模倣になつて、流轉りうてん限りない創造の聖道を誤るものだ。縁えんがあれば、またきつと何處どこでかお目にかゝられるのだから、今は二人とも寂しく別れような。寂しさは、尊いものを心の衷うちに育てゝくれる。大悲の思召は、人に凡てのものを棄てさして、寂しい思ひを抱かせて下さる……それは有り難いことだ。寂しい生活の中に、み佛は靜かな細い聲で、人の靈魂に無限をさゝやき給ふものだ！」

斯う聞かされると、法慧は、哀れな乙女のやうに、衣の袖で顔を掩ひ、背を浪うたせつゝ咽び且つ泣きくづほれた。

法慧が稍泣き靜まるのを待つて、範宴は、

「ぢや、根本中堂までお出でなされ。永くなると、お勤めを劣つてよろしくないからね」といふた。

法慧は泣く泣く範宴について來た。

根本中堂のあたりに出ると、範宴は身體がしびれるやうになつて立どまつた。パツと光のうに、懷舊の情が範宴の心を撃つたのだ。今から十九年前、範宴が丁度十歳の時であつた。慈圓僧正に供はれて、山門に入り第一に、掌を合せて禮拜したところは、こゝであつた。

その時分、只わけは解らず、稱名を唱へて、藥師瑠璃光如來を拜した心持が、今更のやうに浮んで來た。範宴はその事を法慧に語つた。

○「最初に見る時と、最後に見る時の心持には、吾知らず何か、びつたりとするものがあるな。

人間の神祕、存在の敬虔といふものが、その時には分明するものだね。人は、最初の心持と、最後の心持を失つてはいけない。最初の閃めきと最後の透明さには、人生の尊いものが啓示される。それは非凡なものだ。人間は非凡に始まり、非凡に終るものだといふことをつくづく感ずる。けれども、人は最初のもものと、最後のものを失つて、慣習に墮落する。その墮落は、生命を涸らす恐ろしいものだ。自分では怖ろしいとは思はずとも、涸れて固まつた生命は墓石のやうに重く、習慣に化石して、人を壓へる。一切の壓制や、妥協や、權門名利の慾望は、最初と最後の閃光を失つて涸れ果てた人心の排斥物だ。自分達は、刹那々に、久遠の原始を感じ、最後を感じなくてはならぬ。その瑞々しい心を持つ人でないと、み佛を見奉ることが出来ない。あゝ、十九年前、根本中堂で、藥師瑠璃光如來を拜んだ私の心は祝福されて居た。今また最後に根本中堂の前に立つた私の寂しい心持も同じく祝福されて居る。それと同じで、人間は生れたといふことゝ、死ぬるといふことは、大きな奇蹟だ！ 生れる時のことは分らない。死んで後のことも分らない。然し、生死は人生の大なる二つの奇蹟だ。この二つの大なる奇蹟は、自分達の現實生活不斷の閃光でなくちやならぬ。常に新らしく生れ、常に新らしく死ぬ！

すると、十界の神祕も、み佛の道も明かになる。凡てを棄て、死ぬる刹那を持ち得る人が生きて居るのだ。生きた人は刹那の死を體驗して居る人だ。謙讓な心、一念の決定、名門權威を棄て、それに打勝つ内心の閃きを持つた人は、刹那の死を現して、新生に入ることの出来る人なんだ。最も大なる生とは、凡てを棄てた心持だ……その力、その輝きが無極の生なんだ。

② なあ、法慧！ 私はさう思ふんだ。だから、お前が私と別れる寂しさも、現身刹那の死を経験して、新生に入る祝福なんだ。私を徒らに崇拜しちやいけない。英雄崇拜や、人物崇拜は、やがて、英雄に叛き、人物に叛く端緒なんだ。只寂しさが情に深い心をはぐみ、凡てのものと別れる刹那が、生を意識する祝福の原始だ。常に原始の心を失ふな。常に死ぬる覺悟をせよ、そして、物に深く感ずる心を持つて居れ。それは感傷的であれといふのぢやない。最利と最後の端々しさとその力に生きて、閃の中に、凡ての事象を味ひ、規矩や、哲理や、戒律や、他人の言行に盲従することから超越して眞如に觸れよといふことだ。さういふ人は、人間としての眞を育て、行く人だ。道理の是非曲直を刹那に直覺し得る人なんだ。新らしい宗教と、久遠の救ひは、さういふ人々、僧に非ず俗に非ざるさういふ人々によつて始められるものだ。私は信じ

てゐる」

何時の間にか涙を収めてゐた法慧は、顔を輝かして切りに喜んだ。

「さあ、それぢやお別れしよう」といつて、範宴が法慧の手を握ると、法慧はまた涙ぐんでしまつた。手を解くと法慧は、茫然と範宴を見て居たが、

「僧都様は、何にもお持ちにならないので御さいますか？ お荷物は誰が運ぶので御さいますか」と尋ねた。

「何にも荷物なんか、ありません。私は凡てのものを棄てたんだもの。全世界をも棄てなければ、人は生命を得られない。それが涅槃だ。凡てを失つて、凡てに生きることが涅槃だ」

この言葉を最後に、範宴は法慧に別れて山門を出て立つた。木がくれに赤が見えなくなると、十歩二十歩法慧は後を追つて眺めて居たが、遂に師の影を見失ふと、山門まで立戻つて来て、そこで聲をあげて泣き伏した。

「僧都様！ 僧都様！」

範宴が山門から三四町も行つたと思ふ頃、後ろの方から、走り寄つて来るあはたゞしい足駄の音と共に、荒々しく呼び止める聲がしたので、範宴はふりかへつた。

跋をひいた哀れな青年僧を五六歩後にして良親坊が駈つて来るところだ。

「あゝ、藏圓が走けつて来る！ 可愛想に、どんなに苦しからう！」と思ふと、範宴はそこにビタと立止まつた。

良親坊は、法相宗田舎寺の息子で、後嗣を弟に嗣り、興福寺に暫らく學び、後高野山に入つたが、四曼三密の教義に合點の行かないところがあるといつて、先輩と議論し、追ん出されて、眞言宗の階級的習慣を罵倒し、誰かの紹介で五六年前から叡山に来て居る青年であるが、天台の三諦圓融、一念三千の道理が、自分の心持には一番、自然に響くといふて喜んで居た。が昨年あたりから、また臨濟宗を切りに喜び、これが一等自分にはいゝといふて居た。叡山では秘かに外道あづがいにされて居たが、それでも良親はそんなことには平氣で、教義が違はうが違ふまいが、學徒が研究して居る間は、國家もお寺も俺を保護してくれなくちやならぬと公然といひふらし、誰か不穩なことでもいふと、

「何んだ？ 何だ？ あゝアハハハハ」と大口をあけて笑ひ、相手の誹謗を却つてこちらから揚げ足にし、遂には相手をも抱腹倒させるといふ面白い男であつた。だから、外道といふことは一般の認むるところだつたが、その頓智といはふか、磊落といはふか、無邪氣といはふか、怒ることも、悔むことも知らぬ快活な性格を誰しも愛して、彼を意地悪く苦しめようとする者は一人としてなかつた。

彼は、五尺二寸にも足らぬ小男で、年はまだ三十を出たか出ないか位なのに、頭は禿げて居るので、剃をあてる必要もなく、眼ん玉が少し狡猾さうに光つて居るが、何か一寸人が言をいひかけると、「うむ、さうか／＼ワハハハ」と笑ひ出して面白がるといふ男なので、誰しも眼つきの狡猾な處まで氣にする者はなかつた。

若かい僧侶達の中には、彼を頼りきつて居る者さへあつて、夫等の中の一人が、或る時大變な失策をしたといふことで、良親はそれに忠告をするやうにと、先輩からいひ含められた。良親は眞面目に、一寸忠告をしたが、忠告された沙門が蒼い顔をすると、ボンと肩をたゞいて、大聲あげて笑ひながら、「何だ何だ、蒼い顔して、アツハ／＼」といつて、サツサと何處へか行

つてしまった。

その無邪氣な良親が世間を知つて居ることは、當山一で、親しい仲間には、異性と關係した
ことまで、悉皆話してしまつて、自分ながら喜んで居るといふ性質の男であつた。

走り寄つて來た良親は、

「どうした？ どうした？」と頓狂な聲をあげて笑つて居る。

範宴の側に來ると、「えゝ」と狂的なかけ聲して、右足の足駄を地に踏みつけ、「俺も尻冷やし
に山を出て行かうかな！」といつて、またワハワハと打笑ふ。

範宴も少し笑顔を見せた。すると、良親は

「大送別の酒宴でもしようと思つてたのに……一體どうしたんです？」と尋ねた。

範宴は只微笑して見せただけ。良親はまた、

「ほんとに劇談ぢやありません！ 今度は本當に山を下られるのですか！」といふた。

「さう！」

一流石に範宴式だな！ 珍らしく今度は、打ふさいだ顔をして、「もつと、私はお話を聞いて見
たいんでしたがな！」といふた。

側に黙つて立つて居た藏圓は、いかにも別れを惜しむといつたやうな寂しい表情をして居た
が、「道までお見送りさせて下さい！」と願つた。

「あゝ行かう」と良親は、せき立てた。

老樹古木鬱蒼たる險坂を下つて行くと、草原の峠に出た。春の陽を浴びた其の峠からは、京
都が眼下に擴がつて見えた。

「こゝで暫らく休んで別れませう！」範宴は先に立つて、草原に腰をおろした。見送りの二僧
も、そこへ腰をおろした。

「一體これから、どうなさるんですか？」と良親は、こゝでもまた問を發した。

「解りません！」範宴は餘韻のある落ついた一言を答へた。

暫らく物案じてゐた良親は、ボンと膝をたゝいて、身體を揺り、「それだな！ 何も解らんのが、
本當なことぢやないかな！」と感嘆詞を放つたが、またカラ／＼と打笑つて、ペラペラと無言

り出した。「實際何も解らせんのだがな。ハハハ、三論、成實、法相、俱舍、華嚴、律宗でも何でも、一向つまみ處がなくてな、眞言でも、天台でも、こねえに、勿體ぶらねえでも、よささうなものにな。私ども水香百姓の子孫にや、漢、隋、唐、宋のハイカラな、威儀三千、白髪千丈といったやうな呑氣さうで、七くどい支那の感化を受けた佛教には、飲みこめないところが多くていけませんな。一體佛教は何故、こんなに七くどく宗派に分れて、その宗派がまた一つ一つ七くどく勿體ぶつたことをいふのだらう？ お釋迦様は流石に有りがたい……有りがたいといつたところで、それも理屈でないとところが有りがたい。そのありがたいところは神祕だな、涅槃だな、それでいぢやないのかな、宗教といふものは……神祕といつたところで、そいつが支那の威儀三千といったやうな階級的なごまかしをいふのぢや、水香百姓には堪らない。そんなところなど、眞言は最も怪しい。……といつたところで、私は矢張、宗教は好きぢや、宗教がなくちや、生きてることが嘘のやうな氣がする。私は一度よく、お尋ねしようと思つてゐました。外の坊主等は皆駄目だ！ 皆駄目な奴ばかりぢや！

私はお釋迦様が好き！ もつと、好きな人が欲しいが、それでも何だか好き！ 私は子供の

時分のことを思ひ出すと、何ともいへない。あの時分から坊主にならうとは思つたが、坊主になつてしまふと、何にも解らん。私が子供の時分、私の親爺は發心して、貧乏寺の住職になりました。まだ親爺が住職になる前のこと、母に連れられてお釋迦様の誕生祝ひにお寺に行つたもんです。善男善女が一ぱいお寺に集まつて居るでせう。寺の壁には天女が舞ひ、花が散り、燕が翔んで、奥床しい佛壇には燈明がともれ、皆がひつそりとして手を合せて居るでせう。私の母は、燕の繪を指差して……あれはお釋迦様のお使ひだよ、……といつてくれたでせう。ほを！、お釋迦のお使ひ！ 私は妙な神祕な感じがしました。そして森閑と坐つてゐる善男善女の中に、小さくなつてゐた私は、人間全體に聞えない詔、喜びの音づれが来るやうな氣がして、シーンとなつてしまいました。私はその心持がすきです。山の中ぢやない、人々の集まつた處でシーンとする心持……涙が出るやうな躍るやうな心持、それが宗教ぢやないでせうかな。そんなら簡単にこれだな」といつて、良親は眞直に坐り直し、拍手をうつた。そしてまた續ける。「……これだな。太陽の方を向いて、スンと立上つて、パチパチパチと斯うやつた瞬間の氣持だな。それを、常住の力にして、新らしい人生を織り出すのだな。只それだけいつて置けばいゝ

んぢやないのかな。それが一心三千ぢやないのかな。パチパチパチと拍手うつた瞬間の浩然たる心持には、天地萬物も粹々として伏し拜み、悪男悪女疫病災難も清められ、大赦ひされて、人々は神々になるのでせう。私は坊主ぢやが、古事記が好きぢや！ そら懐に入れて居ります。伊弉諾の命が神々様をつくれたのは本當に面白い。あんな面白いことは何處にだつて、ありません。なあ、さうぢやないかな。

伊弉諾の命と、伊弉那美の命が、天降つて、萬里もある天の御柱を左右から一まはりし、ハツと行き合ひ、「あゝ美しい乙女！」「あゝ凛々しい男子！」と崇美し合つて抱ひ合ひ、鳥々や神々様をお造りになつたといふことは、素破らしいことですが、その伊弉諾の命が、黄泉の國から歸つて、投げ棄て給ふた杖、帯、裳、衣、禪、冠、腕輪、また身體を洗つた水の滴から生れた禍の神々、次に禍を直す神々をつくり給ふたといふことは面白い比喩ぢやありませんか？

これは戀しても人が生れ、戀をせずとも人が生れ、棄てられても呪はれても人が生れ、善きも悪しきも様々な人が生れて、生々發展の力で世の中がうまく成り立つといふ意味でせう。天台、眞言の禁欲主義とは大ぶん違ひますね。私は天の御柱が好きだ。周圍が千里も萬里もある

天の圓柱を一週りすると、きつと戀人に出會すると思ひますかな……やつ、これは横濱！ア
ハハハハツ……

何といつても古事記は面白い！ なあ、天照大神が、天の岩屋に入つて堅く戸を閉めてお籠りになると、善も悪も世界中の人間が、いや多くの神々が、岩屋の前に集まつて大騒ぎだつたでせう。高天が原も、どこもこゝも、世の中が眞暗になつてしまふと、神々様の大賑はひが始まつたといふのです。天の宇受女の命が、空槽の上を踏み轟ろかし、乳房をむき出して踊り、八百萬の神々が、高天が原も揺り動く程笑ひこけたでせう。すると、天照大神が、ソツと岩屋をあけて見られたら、そこにかけてあつた鏡に自分の顔が映つて居たので、いぶかしさうにして居ると、手力男命が、大神を引つぱり出し、世界中がまた明らかになつたでせう。

私には、それが面白うてなんのです。世界は今も暗です。人間といふ現代の神々は、人生の悲痛に泣いて居るでせう。が、それぢや、宗教は解らん。天の岩屋の前では、神々が暗の中で、笑ひこけて賑つたのです。人間は、寂しく一人で泣くのぢや駄目。人間は闇の中に集まつて、火を焼き歌をうたひ、笑ひどよめきながら、祈らねばなんのです。今の坊主はお經をあ

げるだけ。それぢや駄目ぢや。天の宇受女の命のやうに踊らんといかんのです。手力男の命のやうに神様を腕力で引っぱり出さんといかんのです。坊主には踊りと力の祈願がなくちやいかんです。そして笑ひは民衆の御願です。

なあ、人々は集まつて、笑はないでは宗教がなり立ちませぬ。引籠つて考へてばかり居ると人間は三千の諸法に身をしばられ、天台だの、眞言だの、いや三論、成實、法相、俱舍、華嚴、律宗など、七くどい宗派まで人間を縛つてしまふのです。人を救ふ唯一の宗教が今は人を縛る宗教になつて、八俣の大蛇のやうに、八つに分れて、人を喰ふて居るぢやありませんか？ 救とか解脱とか、以てもの嘘八百です……アハハハハア——

なあ笑ひが民衆の宗教です。踊りと力がその中から出て來ます。それが坊主の使命です。そして坊主には、男と女が居らんとならんのです。踊れない女は、地獄の蓋を被つて、鬼の石臼を曳いて居るのぢや。力のない男は、神の御手が握れずに、こんな風に手を組んで居れば（眞言の合掌をして）縛られた三千の繩や、閉ぢこめられた宗教の獄屋から助け出されるものだと妄想して居るのでアハハハハ——

いや、それはそれと、人間といふものは妙なものですな。一人居つちや笑へません。女も男も澤山集ると笑ひたくなります。笑ひは人心を神秘的に綜合します。これこそ、新人種、新時代を創造する大なる母です。笑ひは、凡ての新らしいものを産み出す生の閃光です、讚美です。いや、一人でべら／＼饒舌りすぎましたが、一寸待つて下さい。

日本は今、未曾有の危機に臨んで、人種的覺醒を迫られて居ます。源平の盛衰この方、ゑらい勢で利己主義、個人主義が發達しましたが、然しどんな個人だつて、團體生活から離れては存立が出来ないといふ時代になりました。これは素破らしい時代への否むべからざる兆候です。それから天災の續出、疫病の流行は何といふ悲惨なことです。おまけに宗教の墮落、分立は何といふ淺間しさです。今や、京都は墮落の中心、詩歌管絃にも淫蕩の氣分が流れ漲つて居るぢやありませんか？

宗教も社會も天災も疫病も、外部から人間を殺さうとして居る此の時代に、個人の意識が鋭くなつて、團體的精神、新らしい統一の感じが、何處となく一般に動いて來たことは、來るべき時代への大なる鼓動です。今は、何か、新たなものが、日本の内部から産れて來なければな

らぬ奇機に遭遇してゐると思ひます。新しい天の宇受女の命が、新しい舞を踊り、新しい手力男の命が、生の岩屋から新しい光を引き出さなければならぬ時が來てゐるのです。それには、民衆が暗の中に集まつて笑はなければなりません。

私共各自の生活には、綜合性が成り立たなくてはならんものです。眞言、天台、禪、法相といつたやうに、各宗が分立して争ふのは、人間の生活から綜合性を奪ひ取ることです。人道といひ、宗教といひ、これは必ず全體綜合の一大奏鳴樂なんです。人類の目的は、集合勢力の高貴なる生活を可能ならしむることです……その覺醒、即ち人種的覺醒、人類の覺醒によつて、個人の生活行爲が眞實に行はれて來るものです。天照大神が天の岩屋から出て來られたといふことは人類集合勢力の驚くべき覺醒を比喩的に語つたものだと思ひます。

その覺醒の起ること、それが涅槃ぢやないでせうか？ 私はさう解します。涅槃は個人と全體との渾然たる覺醒生活だと思ひます。冥想ぢやなくて、笑ひだけがよく其の狀態に、人心を刺戟促進してくれると思ひます。

考へて下さい……」こゝで、どうしたのか良親は涙ぐんでしまつた。晩宴は、何ものかに胸

を襲はれた。

「考へて下さい」と良親はまたしめつばい聲で繰り返へした。「あなたと私と心が合ふ時、そこには何ものかあります。人々が集まつて心を合せ、團體と團體とが集まつて力を合せ、民族と民族とが接して相觸れ合ふ時、双方を貫ぬいて動く眞實な何ものか、そこにあります。その何ものかは、相互の關係を理解せしめ、自己の立場を自覺せしめ、或る結果の方へと動き出す新らしい大きな力です……その力に醒めた者が、神を認識したんぢやないでせうか？ 人が孤立的になつては、決して正義も人道もありません。孤立的に人々が叫ぶ正義とは、足なへの正義です。源氏の一族徒黨が東國に起つた時分の神々しい力は、どうです。彼等は渦卷のやうな勢力を巻き起して、正義を高く叫んだではありませんか？ けれども、頼朝が征夷大將軍になり、諸國に守護地頭を置いて、天下の警備を嚴にし、上下擧つて、自己の安住を目的とするやうになりましてから、時代を風靡する深刻な力はなくなつて、凡てが社會を機械化し、個人を束縛するやうになりました。現代のこの弊風を破るものは、人心綜合の笑ひです。笑ふ時程、人は觸れ合ふところはないのです。學者も凡夫も、男も女も凡てを貫ぬいて統一的に人類を生かす自由

の力は笑ひです……笑ひの中から踊りが現はれ、力が現はれて、暗黒の世界に天の光明を引き出すことが出来るのです……あゝ少し饅舌しゃべり過ぎました。赦して下さい。アハハハア——」
こゝで話を止めるのかと思へば、良親はまだ口を動かして居る。「……とはいふものゝ、私は寺が好きです。方々から集まつたいろんな坊主の居る寺が好きです……私は托鉢たくはつが好きです。何處どこへ行つても、いろんな男、女に會ひ、どんな階級、どんな社會にも親しめるからです。私は女が好きです……女が居ればこそ、涙もあり、生の嚴肅げんじゆさもあり、抱擁だうようの喜びもあり、盡つきざる心の新らしさもあるのです……あゝ私は破戒僧はけいそうです。私は美しい女を見ると堪らなくなり、何故なぜか堪らなくなります。が私は僧侶そうりょです。僧侶は鎌かを持ちませぬ。僧侶は金を持ちませぬ。けれども僧侶は世界を教化けわします。だから世界は僧侶を食はしてやらんとならんのです。ですから、私は叡田えいだに坐り込んで食ふて行くのです」眼がドロリとなつたかと思ふと、また良親は、アハアハと笑ひ出して、「何處どこに行つても私はこれぢやが、女のこと追おん出されたことは、まだ一度もありませぬ。教理の議論ぎろんぢや追おん出されたが、教理なんてものは、人を飢えさせるものだな。教理の親坊主おやぼうしゆは、どいつも、こいつも、もう遠くの昔、影骨かげかほになつてゐなくち

やならん筈だが、どいつも、こいつもベン／＼と肥つてる……それがいけない、それは大詐欺をやつて盗んだものを腹はらふく食たふたからです、アハハハア……」

日頃、範宴は良親と餘り親しくはして居なかつた。時々、良親の方が話はなしにやつて来て、嚴肅な問題でも何でも笑ひ話はなししに流してしまふので、範宴は寧ろ、良親を避けたいやうな事さへあつた。特に、噂うわさによると、良親は村々町々の百姓娘や、茶屋女や、寡婦あはれなどの間に、澤山な色女いろをんなを持ち、子供さへ幾人も産ませて居るといふことだつたが、範宴はこの年に至るまで、童貞は勿論のこと、宗教的嚴肅を慕ふ心から、絶対に婦人との肉的關係がなかつた。良親のそのみだらな態度は、範宴にとつて氣持が悪わるかつた。一度や二度良親を叱責してやらうかとまで思つたことさへある位だ。それにしても良親が日頃よく本を讀むのは感心だつた。が、現代の八宗はつしゆを何なにも彼かも嘲あざわらつて、どの宗派にも痛切な經驗を経ない内に、次から次へと、色男いろをとこが情婦じやうぶをあさり歩くやうに宗旨變へをし、今は叡田えいだに居ながら、天台の宗旨をも信じないで、大びらに山門生活をして、少しも良心りんしんに疚いづしいといふ風ふうのないのが、範宴には到底賛成が出来なかつ

た。

けれども今、良親が藏圓とこゝまで飛び出して来て、べらべらと饒舌つた言葉の中には、何かしら、鋭い、そして眞面目なものが光つて居るのを、範宴は聞き流しに聞いてゐることが出来なかつた。

「僕は君の良親式に觸れた……君の核心の何處かに觸れた」と範宴はいふた。

「戯談ぢやない！」といつて、良親は眞面目な顔になつた。「何處かに觸れたんですか？ 本當に全くさうだぢやと何故いはないのですか？」……斯ういつた時には、もうゲラゲラ笑つてゐた。

範宴は笑へなかつた。良親も、本當に兄弟だと思ふた。が然し、「性格の違いぢや。苦悶のどん底まで、苦しみぬぐのと、笑ひのてつべんまで笑ひこけるのと……それは全く反對だが……いや、それがよい！ 笑つて下さい。どこまでも君は笑ひこけて下さい」範宴は斯ういふた。

「が然し、もう笑へません。一體君はこれからどうなさるのか？ まさか、こんな時代の他宗派に、宗旨變へをされるのであるまいのに……何の野心があるのぢやありませんか？ 君に

は何か大きなものがあるやうな氣がします。それは私には何やら解りませんが、變な、妙な方法で私はそれにおびやかされるのです。だから私は君を知りたい……知りたいから、こゝまで飛んで來た。僕は人生には、もつと何か在ると思つてゐる。現代の八宗には勿論無い何ものかあると思つてゐる……それは宗教といふやうな形では分らないのかも知れない。が僕はそれを知りたい。いやそれは知られないものかも知れない。知られないものだつたら觸れて見たい。それは幻影かしら。よし幻影だつたところで、矢張それは尊い。……何だらう」といつて良親は頭を傾け、「いや、それだ。それが君には在るやうな氣がする。僕は笑つた後で何時もさう思ふんだがな！ いや何でもいゝ、僕は知りたい！ これから君はどうなさるのですか？」良親はまた尋ねた。

範宴は、眼をつぶつた。眼をあけて、溜息をついた。

「僕が、その何ものかを持つて居るといふのぢやないかも知れない。君、自身の大きな器に、まだ有り餘つたあきがあるので、變な空乏を感じてゐるのかも知れない。僕には何もないのだ。僕は凡てのものを棄てた。僕は自分のものとして、何も持たない。何かあつたら、それは人類の

ものだ。いや、み佛のものだ。僕は只寂しきだけしか持たない」と範宴はいふた。

「いや、その寂しさかも知れない。そいつが本能的に僕をひきつけるんだ」といつて良親は暫らく考へてゐたが、「あゝ、そこだ。それで一つ尋ねたいことがあつた。僕は主張を持つてゐる……人間の徹底した主張は、鬼神をも地獄をも薙き拂ふものだ。人間の眞乎たる主張は、もろくの神々、もろくの菩薩、化佛が地上に出て來られる天門ぢやなからうか？　が、君は、その主張といふことをどう考へるのです？」

「僕には主張がないんです。主張があれば、お寺を立て、弟子を集め、寶を集め規則を設け、人々を訓練して、自家の勢力を愛するのだが、主張といふものがないのだ。僕には何も無い。只、阿彌陀如來が在られるだけだ。人々は、阿彌陀如來から離れようとして離れられるものでないのだ。人間が求むるのぢやない。阿彌陀如來の本願が、無意識の中から意識へと人間に訴へ出られるのだ。如來の意志が、その命法が、人間に訴へ出て、人間を動かし給ふのだ。人間は皆、その神祕に連なつて居る……如來の本願力！　それだけが眞實なのだ。眞實なものは他力なんだ。人間に主張といふものが許されるものならば、それは人間の心に燃ゆる他力の木願

ばかりでなくぢやならんものぢやあるまいか？　僕はさう思ふんだ。人間は何も誇るものを持つてゐないのだ。人間は誇る時には、きつと間違つてゐる。人間は只、この悲願に生きるより外に道はないと僕は思つてゐる。悲願だ！　悲願といふ言葉が、僕にはしつくり胸に合ふ。笑ふのもいゝさ。けれども眞實笑ふ聲の底から、人間は涙を流すぢやないか？　君も、その涙を持つてゐるんぢや。君も、その悲願を持つてゐるんだ。だから君も大虚空の念になやまされるんだ。あゝ、それも人間のものぢやないのだ。如來御自身の悲願なんだ。如來の悲願だから誓願不可思議だ！　その誓願は、善見樂王のやうに、一切世間の法に染まず、利鏽のやうに、一切もろくの魔軍を伏し、導師のやうに、一切生死の縛を解き、疾風の如く、一切の罪垢に染まず、磁石のやうに、もろくの衆生を完全な智城に入らしめ、伏藏のやうに、一切有爲の善を映奪し、大地の如く、一切善惡の往生人を養育し守護し、大火の如く、一切煩惱の垢を濼ぐのだ。……僕にとつて、信心といふのは、本願力廻向の信心です」範宴が斯ういふと。良親は黙つてしまつた。藏圓は俯向いたまゝ頭をあげない。

範宴は、別れを惜しむ藏圓と、遂に別れなくてはならなかつた。良親は改たまつて、「どうぞ御機嫌よろしく」といひ、藏圓は、「また何處でか、きつとお目にかゝりませう」といつて涙をこぼした。

坂を下つて、いよいよ後の峠が見えなくなる頃、ふりかへつて見ると、二人はまだ絶壁に立つて見送つて居た。藏圓は頸を前の方にのぼし、良親は法衣を旗にして打振つてゐた……が遂に最後の瞬間が來た。そこから一町も下らない内に、早、彼等の影は見えなくなつてしまつた。

「あゝ、叡山、さらばよ！ 日本の歴史に、日本の過渡期の生活に、偉大な印象を残した叡山よ！ 現代日本最高學智の源なる叡山よ！ さよなら！ 自分は汝、最高權威の學地と今最後の告別をするのだ！」範宴は深い溜息をついて、今一度雲がくれ行く比叡の峰をかへり見た。

「山を下ることは、一生の名譽と、地上の權勢とを悉く抛つことだ！ 日本に渡つて來て、あらゆる貴族の間に大勢を得た一切の佛教に別れることだ。さらば叡山よ、左様なら！」今一度範宴は斯う繰り返へした。

足は輕るく、坂をヒョロ／＼と下つたが、範宴は急に凡てを棄てた寂寞に包まれた。けれど

も、その寂寞の中には、凡てのものが赤裸々に原始そのままの素樸を以て範宴の前に擴がる。

「何にもないのだ！ 只原始そのままの静けさだ！」範宴は、隈なく澄みきつた心持、純眞な新らしい若やかさを自己に見出した。

定め行く處もなければ、心に障るものもない。たゞ凡ての重荷から……名門、地位も、羯摩の教理も、業の觀念も、地獄と死の恐怖も、一切思辨の方式も……悉く解脱しきつた涅槃の祝福が此の杯にこぼるゝばかり。

「あゝ、み佛よ！

汝は吾に無限の悲願を吹きすさび給ふ。

汝の唇吾にふれ

死なざるすさび吾が衷におこり

心は有限を超えて虚空の如く

萬有にふれて大悲のかなで……」

思ふともなく、範宴の透徹した胸の底から、血潮のせゝらぎが、こんな詩となつて出て來た。

下り行く山坂、もう幾度往來したやら分らぬ其の山坂が、今日は洗はれたやうに新らしい。足もとから擴がつた世界……古るいその世界さへ何處までも奇蹟のやうに瑞々と靜かな光をあびてゐた。

範宴の心には、またしても奇蹟が光つた……それは限りない水脈のやうに淡い光芒をスーとひいた新らしい星！

(親鸞第一部終り)

大正十一年七月五日印刷
大正十一年七月八日發行



創作親鸞第一部
定價金貳圓八拾錢

著者 三浦 關 造

發行者 鈴木 芑
東京市神田區表猿樂町二番地

印刷者 佐藤 三郎
東京市本郷區湯島五丁目四番地

東京市神田區表猿樂町二番地

發行所

新文社

電話神田二九四四番
振替東京八二二六番

野村隈畔氏著

『自我の研究』の姉妹編

改 版 自我を超えて

四六版總クローヌ裝
紙數三百餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料金拾八錢

「自我を超えて」一篇は、予の最近に於ける精神生活の必然的な轉換を叙したもので、謂はば予の精神歴史である。若し予の「形而上的要求」が哲學構成の作業を始むるとすれば、その材料は正にこの精神歴史である。しかし哲學的認識の根本對象たる普遍的な絶対價値は、生きた現實の生活において直接に體驗せらるゝものであるから、予の實際に經驗したこの精神歴史は、その意味において哲學的意義を有するものであるといふことが出来やう。

予は先きに、自我の發展完成をもつて生活の倫理的な根本基調を形成するものと思维し、自我の哲學的認識と情熱的體驗的な自我の把握とに努力した。然るに予の精神生活の必然的轉換は、自我の發展完成の理想は、自我そのもの内部における自律的肯定の努力のみによりて達することの不可能であること、言ひ換へれば、更に自我を超えて自我以上の絶対的存在を捉へることによりてのみ、初めて達し得らるゝものであることを認むるに至つた。

即ち所謂信仰生活なるものは自我の完成を理想とする倫理的な生活に於ても必然的に認容せなければならぬと認められた。故に「自我を超えて」一篇は予が現在の倫理的な生活より宗教的生活に移入する橋梁を爲すものである。而してこの轉換移入は、生活において又哲學に於ても、極めて重要な一般意義を有するものであると思ふから、敢て本書を公にして「自我の研究」の讀者に提供する所以である。(著者)

著者の遺せる唯一の韻文と書翰集

孤獨の行者 野村隈畔氏著

孤獨の行者

附 集 書

四六版總クローヌ裝
紙數三百五十餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料金拾八錢

本書は 詩人と 隈畔氏 を知る 唯一無 二の書

著者隈畔氏は、哲學者であると同時に又多感なる詩人であつた。そしてそれは詩歌を詠まざる詩人であつた。然し唯一度「未知の國へ」と題し詩に非ず小説に非ざる一編の韻文を創作したことがあつた。今、此創作に加ふるに、氏の親族妻子恩師知己友人に贈つた書翰文數十編を合せて面目を一新したものが本書である。

本書の目次

- 一、未知の國へ
 - 二、不思議な夢
 - 三、白花の咲く村
 - 四、自由の樹の讚美
 - 五、暗黒の森の七年
 - 六、靈感
 - 七、獅子吼
 - 八、論難
- 外書翰數拾編

金子白夢氏著

著者最初の一大力作!

體驗の宗教

總ポプリン装、箱入
四六版三百頁
定價金壹圓八拾錢
送料(書留)金拾八錢

著者は宗教思想界の新人にして、宗教生活の體驗者也。二十餘年間の研鑽と體驗と相待て、今や本書成る。洪州・趙州・エツクハルト・エマルソン・騰濟・黃檗・保羅・道元・基督等の古聖を捕へ來て宗教的意識の妙を發揮す。深奥なる想と含蓄ある文と相抱いて無限實在の風光を語る。紀平博士序して曰く「是亦澤然たる一個の大詩也」と思想と冥想と體驗とに生きんとするの士に薦む。

△洪川の直想(一)序(二)現實即生命(三)光耀無量(四)無上妙(五)性現(六)如實の風光(七)無碍の一境(八)其美不可言(九)不玄の玄(十)回也其後(十一)無爲の爲(十二)久遠の現在(十三)宗教の詩(十四)生命の躍動(十五)感格の一線(十六)宗教のエルトの無字とエツクハルト(十七)趙の無(十八)エツクハルトの神祕的思想(十九)絶妙の狀示(二十)永遠の一如即一の地(四)心靈の尊嚴性(五)最高者の聲

△臨濟の宗教(一)序(二)自己の真相(三)凡聖不二(四)無碍人の自由境(四)當體の秘密(五)意識直接の自證(六)純粹意識の體驗境(七)自證の權威(八)黃檗の體驗思想(九)序(二)唯是一心(三)宇宙意識(四)無心究竟の境地(五)圓滿具足の自證(六)無求無著(七)念即眞(八)唯此一事實

△基督の禪機(一)序(二)內的經驗の象徴(三)曠野

△保羅の禪機(一)王者の宗教(二)最高要求(三)生活即宗教(四)結惑の神(五)萬有皆淨(六)證入の心境(七)轉身の一境(八)體得の風懷(九)新人の生活(十)「是」の人格化(十一)最勝の靈能(十二)感應道交(十三)道元の宗教(四)生死即生命(五)本來の面目(七)本心(八)相傳の嫡意(十二)安樂の法門(十三)身心一如(十四)宇宙精神(十五)超自他境

△東洋意識の靈趣を憶ふ

△白隱の夜船閑話

△行乞生活

金子白夢氏著

「體驗の宗教」の姉妹編出づ!

體驗の歩み

總ポプリン装、箱入
四六版三百餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料(書留)金拾八錢

著者は現代の宗教界に於て東洋意識と西洋思想とを徹底的に融合して、聖の線に立つて生活即宗教、宗教即生活の心境を來るべき時代に於て實現せんと期して居るものである。今、此の見地に目覺めて新らしい「體驗の歩み」を試みたものが即ち彼の此の著である。

彼は此の著に於て生活に即して科學を批評し、生活と藝術との生きたる關係を明かにし、深刻なる現實味を痛感し、體驗の宗教に入つて魂の窓より靈界の光景を凝視し、更に轉じて神祕の境地に美の姿を掴み、タゴールの音樂思想に入り、メエテルリングの靈魂哲學の跡を追ひ、スノードンの形而上學に接觸し、オイケンの信仰を叩き、道元の宗教を探り、テニスンの詩を味ひ、最後に將來來らんとする新文明に於ける新宗教の姿を明にして、東洋意識のために一新啓示をなすところ、著者獨特の見地を見るべく、詩的豊富さと宗教的敬虔味との溶け合つた一種の散文詩とも云ふべき論文集である。

□金子白夢氏著□

詩と宗教との交響樂

光に養はれて

總ポブリン装、箱入
四六版二百八十餘頁
定價壹圓八拾錢
送料(書留)金拾八錢

著者第二の新著たる此書は血に依りて體驗附けられた著者の生活記録である。魂と魂とが溶け合せて永遠の生命が呼吸して居る。現代文明に對する獨斷の批判、經濟より宗教への道、新文明の曙光と深思索の心證とが渾じて一つに響いて居る。著者卅年の精神生活の結晶が暗示と豫言から泉んで居る。全人類愛の燃ゆる様な信念が現代人の生活を深め精神を淨化する力に満ちて居る。詩と音樂と宗教とが眞生活の中に匂ふて居る。至深信樂の敬虔味が全編を潤ふして居る。

第一編南窓の下にて——生 語寸韻・詩神一味・第二編生活 活(十四) 懺悔詩人の生活(十五) 私の思想生活(十六) 象徴の生活(十七) 聖なる闇の生活(十八) 心に徹した生活(二十) 哲人の生活・第三編現實の彼岸より——創造の歡喜・生命の豊かさ・詩と宗教と・心許語・一歩一躍・斷想語・カーペンターの藝術思想・タゴールの自然觀と其の詩。

活の破壊と建築と・思想の生活の種々相——(一)愛の生活(二)悲みに生くる生活(三)私の讀書生活(四)神祕の生活(五)思ふ儘の生活(六)土に親む生活(七)深生の生活(八)心證の生活(九)思索の生活(十)歡喜の生活(十一)古典生活(十二)深い戦ひの生活(十三)夢見る生活

活の破壊と建築と・思想の生活の種々相——(一)愛の生活(二)悲みに生くる生活(三)私の讀書生活(四)神祕の生活(五)思ふ儘の生活(六)土に親む生活(七)深生の生活(八)心證の生活(九)思索の生活(十)歡喜の生活(十一)古典生活(十二)深い戦ひの生活(十三)夢見る生活

□金子白夢氏著□

神祕の宗教

總ポブリン装箱入
四六版三百九十餘頁
定價貳圓六拾錢
送料(書留)拾八錢

これ最も深奥なる宗教的實參の境地に入れる著者の第二著作也。思索より體驗への道を辿り、現實生活の唯中に立ちて神祕の生活を體し、詩の國より信の國に生きつゝある、著者最近の内面生活史也。煩悶と懊惱との戦を経て、端的に神の胸より感應の聲を聽き得たる魂の記録也。時代の精神が宗教的經驗に向つて白熱化し來れる新時代の要求に應ふる現代の約翰傳也。

2577
く

録目書圖版出社文京

イブセン原著 金子白夢氏譯 宗教的色彩に富める不朽の傑作

建築師ソルネス

絹表装箱入
四六版二百四十頁
定價壹圓八拾錢
送料(書留)金十八錢

深刻なる社會劇より徹底せる神祕劇に轉じた第三期のイブセンの『建築師ソルネス』は、數ある彼の著作中の最も深みのある作である。此の作は彼が單なる戀愛喜劇の描寫や社會改造の問題劇に物足らずして更に現實の深みに徹して神祕的象徴的な世界に沈潜し透入してそこに現實の奥に流れつゝある新らしい光に觸れて『或物』を掴み出し、其の掴み得たるものを暗示的な表現の姿で投げ出したものが此の作である。此の作は彼の全著作中最高の名作たるのみならず、恐らくは近代文藝中の最大傑作と云つても過言ではあるまい。新神祕主義が時代の新思潮と化つて來た今日此譯の出づる偶然ではない。譯者はイブセンの熱愛者、就中『建築師ソルネス』は譯者の藝術上の戀人である。此の作はシグムンド・イブセンによつて獨譯されたものを底本として譯されたもので、原作其の物の嚴密さと神祕さとが如實に寫されて居る。此の點に於て他の譯と全く其の選を異にして居る。

506

178

終